言いさしの繰り返し発話に関する考察*

- 親疎関係による使用様相と機能を中心に -

小此木江利菜** kor.m1610@gmail.com

- 〈目次〉-

- 1. はじめに
- 2. 先行研究と研究課題
 - 2.1. 言いさし
 - 2.2. 親疎関係による言いさし
 - 2.3. 繰り返し発話
- 3. 分析の対象と方法
 - 3.1. 言いさしの定義と範囲
 - 3.2. 繰り返し発話の定義と範囲
 - 3.3. 分析の対象と方法

- 4. 結果及び考察
 - 4.1. 親疎関係による使用様相
 - 4.1.1. 初対面
 - 4.1.2. 親しい友人
 - 4.2. 機能
 - 4.2.1. 初対面
 - 4.2.2. 親しい友人
- 5. まとめと今後の課題

主題語: 言いさし(interrupted speech)、繰り返し(repetition)、親疎関係(intimacy)、談話(discourse)、機能 (function)

1. はじめに

日本語の発話は、文意と意図の二重構造を持っており、表面的な文意は容易に理解できるが、その奥にある意図は語彙的・文法的な意味とは異なり、理解が一様ではない(荻原:2008)。その中で、言いさしいは、文を最後まで完結させずに伝達する文末表現の一つであり(白川:2009)、例をあげると以下のような発話である。

^{*} 이 연구 성과는 2021년도 고려대학교 4단계 BK21 중일교육연구단의 참여학생으로서 작성한 것임.

^{**} 고려대학교 일반대학원 중일어문학과 일본어학 박사과정 수료

¹⁾ 文を最後まで完成させずに発話をする文末表現の概念は「言いさし文」(元:2000、白川:2009)、「言いさし表現」(曺:2005)、「中途終了型発話文」(高木:2018)などの用語で説明されている。本研究では、文を最後まで完成させずに発話をするこのような概念を発話の機能から考察するため「言いさし」を用いる。

(1) A: 学科はどちらの...?

B: イタ科です。

A: イタ科って...

B:イタリア語学科です。

(1)は日本語母語話者の初対面の談話で見られた例である。Aが学科を聞き、Bが「イタ科」と答えたが、AがBの発話を繰り返しつつ「って…」を付け、発話を途中で終わらせ、聞き直していることがわかる。Aの発話意図は「イタ科が何学科であるか」ということであるが、文を最後まで完成させずに発話をしている。このような表現は日本語母語話者間で多用されるが(荻原:2008)、文末が文面に表出されないため、外国人日本語学習者にとって難しい表現だといえる。そこで本研究では、言いさしの繰り返し発話に焦点を当て、使用様相と機能を中心に検討する。

2. 先行研究と研究課題

2.1 言いさし

言いさしに関する研究は大きく、言いさし全体の談話機能に焦点を当てた研究(曹:2005、 荻原:2008、李:2013、高木:2018)、依頼場面や断り場面など特定の場面を対象にした研究 (元:2000、小此木:2020)、「ので」「から」「けど」のような形式を取り上げた研究(永田:2001、 白川:2009、高木:2018)に分かれ、様々な観点から研究が行われてきた。

言いさしを談話展開機能と捉え分析した永田(2001)は、言いさしは談話展開上の特別な機能を持つとしている。永田(2001)は、日本語母語話者のロールプレイ談話資料から「けど」と、「けど」とほぼ同じ機能と考えられる接続助詞「が」「ので」を対象に分析を行っている。結果、言いさし「けど」の導入によってトピックがその後展開しているという特徴が見られた。その中で特に「ターンの譲渡」、また「再びターンが返ってくる際の働きかけ」のために使用されることが多く、この機能は談話の過程において、会話参与者の協力によって作られるものであり、参与者達はトピックに関する様々な働きかけを行うことを明らかにしている。これに関して永田(2001)は、言いさしはその後の談話の進め方を聞き手に委ねることを示す働きを持つと述べている。さらに、言いさし「けど」に限らず、「が」「ので」の形式

も談話を展開させる機能があるとしており、これらの形式を含めた様々な言いさしは談話 展開機能として使用されることが考えられる。

2.2 親疎関係による言いさし

言いさしの使い分けと機能に関して曺(2005)では、日韓のドラマ資料から言いさしを取 り上げ、親疎関係を「丁寧体レベル(丁寧体を使用する関係)」「普通体レベル(普通体を使用す る関係」」に分類し分析を行っている。その結果、韓国語の言いさしは丁寧体レベルより普 通体レベルで多く現れたのに対し、日本語の言いさしは普通体レベルより丁寧体レベルで 多く現れた。また、言いさしの機能を「行為要求」「情報要求」「情報提供」「意思表示」に分類 した結果、「意思表示」は韓国語より日本語で多く現れたのに対し、「情報要求」は韓国語で は使用頻度が高く、日本語では使用頻度が低い結果を報告している。このことから、言い さしは親疎関係により使用様相と機能に違いが見られることがわかる。

親疎関係による言いさし2)の使用様相を機能と形式を中心に分析した李(2013)では、女子大 学生の自然会話を対象に言いさしを取り上げ分析を行っている。李(2013)では、親疎関係を 「友人」と「初対面」に分類し、 各関係における言いさしの出現度を考察している。 その結果、 友人関係より初対面の関係で言いさしが多く見られた。また、機能別に見ると言いさしの約 40%は「反応」の発話機能を果たし、その中で友人関係と初対面の両関係で「情報伝達」が最も 多く、初対面の関係においては「情報応答・提供」と「情報要求」の機能が特に多く見られたこ とから、親疎関係による言いさしの使用様相に差が見られることを報告している。このこと から言いさしは、断定を避け発話内容を和らげることができ、相手との円滑なコミュニケー ションのための一つの言語ストラテジーとしてはたらいていると述べている。

2.3 繰り返し発話

日本語母語話者の繰り返し発話に関する研究は既に為されている(中田:1992、福富:201 0、荻原:2015、高木:2018)。その中で、荻原(2015)は、日中母語話者の自然会話を対象に、 繰り返し発話の出現頻度を分析している。結果、中国語母語話者の3割以上の人が「 質問 回答― 繰り返し」の連鎖を好ましいと感じておらず、冗長性のある繰り返しは無駄な

²⁾ 李(2013)では、宇佐美(1995)に従い「述部が省略されている発話や複文の場合、従属節のみで主節が省 略されたりする発話など、最後まで言い切られていない」概念を「中途終了型発話」と称している。

やり取りであり、繰り返しをする会話スタイルは冷たい感じがあると捉えている一方、日本語母語話者の7割以上の会話に繰り返し発話が出現し、9割以上の人が「質問― 回答―繰り返し」の連鎖を、自分や相手の話し方に望んでいたことを報告している。また、日本語母語話者の繰り返し発話のうち、特に、言いさしによる繰り返し発話が多数見られた。この結果に関して荻原(2015)では、日中の母語話者間で繰り返しの会話スタイルに差があり、日本語の言いさしの繰り返し発話は、短いやり取りでのリズム感やテンポが生まれるという詩的機能を果たすと同時に、会話の盛り上がりを感じ、相手の話をきちんと聞いているという合図を送り合ったり、共感や同調といった心的機能も果たす日本語の「慣習的な会話スタイル」であると説明し、お互いに良いと信じている異なる会話スタイルをとることで、結果的に円滑なコミュニケーションができなくなる危険性を示唆している。

また、高木(2018)では、言いさしの繰り返し発話を「談話展開機能」と捉え、日韓の談話 資料を対象に、繰り返し発話を「文レベル」「節・句レベル」「語レベル」に分類し分析してい る。結果、繰り返し発話は韓国語より日本語で多く見られ、その中で、日本語談話では完 全な文レベルの繰り返し、節・句レベルの繰り返しの順で多く見られ、韓国語は一部をや や変えた繰り返し、語レベルの繰り返しの順で見られた。このことから日本語母語話者の 繰り返し発話は、対話者の発話に対してより忠実な再現を志向し談話の展開に繋げる傾向 が見られた。

先行研究から日本語の繰り返し発話に対する評価は文化的背景により異なり、特に日本語母語話者間で言いさしを含めた繰り返し発話が多用されること、また、親疎関係により使用様相とその機能に違いが見られることが確認できた。「言いさし」「親疎関係」「繰り返し発話」個々の知見は得られているが、それぞれの組み合わせが実際の日本語母語話者の言語行動にどのような影響を与えるのかに関する研究は管見の限り見当たらず、親疎関係による使い分けを機能の観点から見ることで、日本語コミュニケーションの理解を助けると考えた。

そこで本研究では、言いさしの繰り返し発話を「談話展開機能」と捉え、その使用様相と 機能を中心に考察する。本研究の課題は以下の2点である。

- 1) 日本語母語話者の談話資料から見られる言いさしの繰り返し発話の出現度を明らかにする。
- 2) 観察された言いさしの繰り返し発話を親疎関係別に分類し、各関係においてどのような機能が用いられているかを考察する。

3. 分析の対象と方法

3.1 言いさしの定義と範囲

言いさしとは、文を最後まで完結させずに伝達する文末表現の一つである(白川:2009)。 日本語の言いさしに関して荻原(2008)によると「人々はできる限り経済的に話をしようとす るので、重要度の低い要素から省略していく。そのため、省略を全くしないで応答するこ とは丁寧ではあるが、聞く側にとっては苦痛を伴うものである」と説明している。言い換え ると、文末まで述べる言い切り表現は、話し手にとっては丁寧な表現であるが、聞き手に とっては円滑な談話展開に繋がらず、言いさしは談話の円滑な展開のためには重要な要素 であるといえる3)。

本研究で取り上げる言いさしの形式は、高木(2018)の定義を参考にする。

- 1) 接続表現:「~て/~し/~ので」などの接続助詞で言い終わる形式
- 2) 引用表現:「~と/~って」などで言い終わるもので「思う・考える・言う・話す」など の述部が省略されていると判断される形式
- 3) 例示表現:「~とか」などで言い終わるもので「ある・言う」などの述部が省略されて いると判断される形式
- 4) 名詞表現: 「名詞(句)+(格/取り立て助詞)」で言い終わる形式
- 5) 副詞表現4):「副詞」で言い終わる形式
- 6) その他:上記のいずれにも分類できない形式

また、本研究における言いさしの範囲がは、曺(2005)の定義をもとに、以下の2点の条件

³⁾ 柏崎(2001)においても「日本語の発話で文末まで述べる言い切り表現を使用すると冷たい印象を与え る一方、言いさし表現は談話を和らげて相手に配慮した印象を与える」と、談話における言いさしを 聞き手への配慮の観点から説明している。

⁴⁾ 元(2000)においても「ごめん、約束があって今日はちょっと」のように副詞で終わる文を言いさしの定 義に含め分析を行っている。

⁵⁾ 言いさしは、文末が省略された表現であるが「話し手が伝達したい述部が発話内に含まれているか」 を基準にした分析は行われている(白川:1991、曺:2005)。白川(1991)では、言いさしを決定付ける要素 として「復元の可能性」を挙げており、話し手の発話文に含まれる「出現部分と非出現部分の意味関係」 という観点から論じている。また、曺(2005)においても「述部が含まれる」言いさしと「述部が含まれ ない」言いさしを中心に論じている。しかし、言いさしの繰り返し発話に関して荻原(2008)は、

を満たす発話を基準にする。

- 1) 話し手が発話を最後まで言い切らず、言いさしを使用し終わらせている発話
- 2) 話し手の意志により発話が言いさしとして現れた発話

曹(2005)では、言いさしを「話し手の意図」の観点から説明している。本研究においても話し手の言いさし使用の意図と関連付け考察するため、発話中に聞き手が割り込み、話し手の意思ではなく発話が言いさしになった場合は分析の対象から除外した。

3.2 繰り返し発話の定義と範囲

言いさしの繰り返し発話は、話し言葉において多く使用される(荻原:2008)。話し言葉における伝達方法の特徴に関して石黒(2013)では「効率性(efficiency)」と「即効性(improvisation)」を挙げている。効率性とは、話し手は聞き手の知らないことだけを話せばよく、無駄なことはできるだけ言わずに済むようになるため、お互いが知っていることを省略すること、また、即効性とは聞き手が話し手の目の前にいて、その場で考えて言葉をつむぎながら話すため、整っていない文が多数使用されること、その中で特に、言いさしや繰り返しのを含めた表現が多く、話し言葉ならではの即効性がにじみ出ると説明している。これらの表現は、書き言葉にすると明らかに不自然になるが、音として聞いていれば、さほど違和感なく耳に入ってくる(石黒:2013)ことから、話し言葉ならではの特徴であるといえ、石黒(2013)の言及から、日本語母語話者の話し言葉において言いさしや繰り返し発話が多用される傾向があることがわかる。

福富(2010)では、繰り返し発話の定義を以下のように整理している。本研究では、福富(2010)の定義に筆者が修正を加えた以下の内容を基準にする。

- 1) 相手(聞き手)の発話の直前の発話の繰り返しであり、聞き手の発話の一部の繰り返しを対象とする。
- 2) 相手の発話の文、節、句、語レベルの繰り返しである発話を対象とする。

Jefferson(1972)の説明は、繰り返しは主に、聞き手の注意や興味を表すストラテジーとして捉えられているとしており、この言及から本研究では、言いさしの繰り返し発話の機能的な面を最優先させることにし、後件の復元の可能性に関しては、次の機会に譲ることにする。

⁶⁾ 石黒(2013)では相手の発話を繰り返す発話の概念を「重複」の用語を用い説明している。

- 3) 外来語や外国語から日本語、漢語から和語へのパラフレーズ(あるいはその逆)は繰り返しの 対象外とする。
- 4) フィラーやあいづちの繰り返しは対象外とする。しかし、話し手が何らかの意図を持って繰 り返したと見なされる発話は対象に含める。

なお、本研究では相手の直前の発話を繰り返したものを対象にし、談話内の以前の発話 は分析の対象から除外する。理由として、本研究では円滑な談話展開のための話し手の意 図を考察することを目的としているため、談話内の以前の発話は対象から除外した。ま た、福富(2010)においても、フィラーやあいづちのような繰り返しは基本的には分析の対 象から除外しているが「話し手が何らかの意図を持ち発話をしている場合」は対象に含めて いる。例を挙げると以下のような発話である。

<例1>

No.	発話者	発話内容	機能
572	JF046	あの方も,,	
573	JF045	いろんな人が<いるんだ>{<}。	
574	JF046	<大学に>{>}、あの人も、大学に友達少なそうだよね。	
575	JF045	2人?。	
576	JF046	ううん。	
577	JF045	<どっち?>{<}。	
578	JF046	<「人名6名」>{>}。	
579	JF045	「人名6名」。	
580	JF046	「人名7姓」君もどうなんだろう<笑い。	
581	JF045	うん。	
582	JF046	うん。	
583	JF045	うん 。	繰り返し
584	JF046	うん ₀	繰り返し
585	JF045	うん 。	繰り返し
586	JF046	ほほほほ2人笑い。	
587	JF046	《少し間》嫌な沈黙だね、今~2人笑い。	

<例1>を見ると[発話574]の[JF046]の「あの人も、大学に友達が少なそうだよね」という発 話に対して[JF046]が「「人名7姓」君もどうなんだろう」と話題を展開し、続く[発話583]の [JF045]の発話で「うん。(「人名7姓」君も友達少なそう)」、[発話584]で[JF046]が再度「うん。(そうだよね?)」のように答えており、これは単なる相づちではなく、話し手の意図が含まれる繰り返し発話と捉える。実際に[発話586]で「ほほほほ」と笑いながら答えていることから、お互いが伝えたいことを理解できていることが確認できる。本研究の分析において、話し手が何らかの意図を持ちつつ相手の発話を繰り返す<例1>のような発話が見られた場合は分析の対象に含める。

言いさしの繰り返し発話の意味機能に関して荻原(2008)は、言いさしの繰り返し発話には以下の機能が含まれると説明している。

- 1) 質問を繰り返すことによる話し手の驚きや不信の表明
- 2) 繰り返しによる話し手の評価や感情の表明
- 3) 繰り返しにより正しいと認識したことの表明
- 4) 聞き手の発話に対し質問をしたり、より詳しい説明の要求

荻原(2008)の定義を踏まえ、本研究で対象にする繰り返し発話の機能を大きく「表示型」「要求型」の2項目に分類し、機能の内訳に関しては、福富(2010)の繰り返し機能と、李(2013)の言いさしの機能を援用し、筆者が修正を加えた以下の機能に分類する。

<表1>言いさ	1.の繰り返1	発話機能内訳
		ノフロロロルXHG1 10/\

分類		機能
	感情表出	相手の発話に対して感じた驚きや納得・不満などが含まれる 機能
	情報提示	相手が認識していない新しい情報を提示する機能
1) 表示型	認識•受信	相手の発話に対して「聞いている」「理解している」という認識 的要素を含む合図を送る機能
	間つなぎ7)8)	ことばのリズムやテンポを良くしたり、ユーモアを込めたり することば遊び的な機能
	説明要求	相手の発話の不明な点に関して説明を求める機能
2) 要求型	確認要求	相手の発話の不明確な点に関して、確認・認識が正しかった のか確認を求める機能

⁷⁾ 福富(2010)では「音やリズムに関わることばあそびのような効果をあげる機能」を含むこのような機能を「詩的機能」と説明している。

⁸⁾ 高木(2018)では「間つなぎ・時間稼ぎ」の用語を用い説明している。

「間つなぎ」は会話のテンポが単調にならないための機能が含まれ、「認識・受信」機能は 「話を聞いているということを示すため」の機能が含まれる(福富:2010)。 「認識・受信」機能 で繰り返しが用いられる場合、繰り返し部分には強勢が置かれないことが多く、また、発 話意図が明確ではなく、あいづち詞に入れても違和感がないことから「認識・受信り」の機 能に分類できる(福富:2010)。

発話機能の判断に関して荻原(2008)は、言いさしそのものから意図を解釈せず、それに 対応した発話から言いさしの発話者の意図を判断できると説明している。これは、言いさ しの繰り返し発話の後に訂正行動などが見られず、このまま話が円滑に進行していること から、言いさしについての解釈が適切である(荻原:2008)ということである。荻原(2008)の言 及を踏まえ、本研究における分析も言いさしの繰り返し発話が、どのような機能を果たす のかを分析するために、言いさしの繰り返し発話の続く聞き手の反応を同時に見る必要が あるため、考察においても聞き手の発話と関連付け機能を判断する10)11)。

3.3 分析の対象と方法

本研究では『BTSJによる日本語話し言葉コーパス2020年版(以下「BTSJコーパス」)』に集録 されている『初対面・友人同士の雑談』を対象にする。対象者は、10代後半から20代中盤の 大学生48名の談話である。コーパスのデータはドラマや映画などの言語資料よりも親疎関 係の分類がしやすく、本研究における調査対象の資料に妥当であると判断した。なお、 コーパス内の文字起こしの際の誤字や脱字はそのまま反映した。

調査の方法は、まず、BTSJコーパスから見られる全ての繰り返し発話を取り上げ、その 中で言いさしの繰り返し発話の出現度を見る。次に観察された言いさしの繰り返し発話を 親疎関係別に分類し、各々の関係でどのような機能が用いられているかを考察する。

荻原(2008)、石黒(2013)の言及から、話し言葉における繰り返し発話は日本語母語話者間 で頻繁に起こること、また、曺(2005)、高木(2018)の結果から、親疎関係による言いさしの 繰り返し発話の機能の現れ方にも差が見られることが考えられる。

⁹⁾ 福富(2010)は「受信応答」機能として分類している。

¹⁰⁾ 荻原(2008)は、話し手の発話の意図の決定は聞き手による決定であり、聞き手の持つ「理解しよう とする意思」が発話理解における必要条件であると述べている。

¹¹⁾ 荻原(2008)は、Jefferson(1972)の機能の定義は「繰り返しは主に、相手の発話を中断して、聞き手の注 意や興味を表すストラテジーとして捉えられている」と説明している。つまり「次の発話や次の話題 を生み出すものとは考えられていない点で、繰り返し発話の相手の理解まで考慮されていない」と繰 り返し発話の分析は、聞き手側の発話も考慮する必要性を示唆している。

4. 結果及び考察

本研究では、日本語母語話者の談話資料から見られる言いさしの繰り返し発話を、使用 様相と機能の観点から考察した。まず、言いさしの繰り返し発話の出現度は以下の通りで ある。

<表2>繰り返し発話出現度

発話	繰り返し発話	言いさしの繰り返し	出現度(%)
計	1036回	473回	46%

観察された発話から、繰り返し発話は計1036回中、その中で言いさしの繰り返し発話が 473回見られ、出現度は46%であった。

4.1 親疎関係による使用様相

観察された言いさしの繰り返し発話を親疎関係別に分類した。結果を以下に示す。

<表3>親疎関係による繰り返し発話

親疎関係	繰り返し発話	言いさし	出現度(%)
初対面	481回	277回	58%
友人	555回	196回	35%
計	1036回	473回	46%

<表3>の結果から、初対面で見られた繰り返し発話は計481回であり、その中で言いさしが277回(58%)現れた。一方、友人の関係を見ると、繰り返し発話は計555回中、言いさしが196回(35%)見られた。この結果から親疎関係による言いさしの繰り返し発話の使用に差が見られることがわかった。スピーチレベル別に考察した曹(2005)においても丁寧体レベルが普通体レベルより言いさしの使用率が高いことを示しており、本研究の結果を裏付けるものだといえる。以下の章では、それぞれの関係で見られた言いさしの繰り返し発話の特

徴に関して考察する。

4.1.1 初対面

まず、初対面の関係で見られた言いさしの繰り返し発話を考察する。観察された例は以下の通りである。

<例2>	初対	斪
~ <u> </u>	コソノヘ	ш

No.	発話者	発話内容	繰り返し
938	JF028	あたしもけっこう授業中ははずして置いてるかも。	
939	JF027	あ、ほんとー?。	
940	JF028	うんー。	
941	JF027	なんか気になるよねー(ね)、付いてると。	
942	JF027	重いし。	
943	JF028	うん、あー、うんうん、 <u>重いし</u> 。	言いさし
944	JF027	試験の時とか,	
945	JF028	うん。	
946	JF027	とりあえずはずすよね。	
947	JF028	そうそう。	

<例2>は、授業中に腕時計をつけるのかに関して話している場面である。授業中は腕時計を外して置いているという発話に対し[JF027]が「なんか気になるよねー、付いてると」「重いし」と続け、この発話に対し[JF028]が「うん、あー、うんうん、重いし」と続けている。この場面で[JF028]は[発話943]で「あー、うんうん」と発話を言い切ることも可能であるが「重いし」と先行発話を繰り返しつつ言いさしで発話を終わらせている。

繰り返し発話に関して高木(2018)は、話し手は意図的に言語表現を先行発話に合わせることによって、相手との協調的関係を築くとともに、思考の共有を可能にし、さらには対話者との距離の短縮、一体感の創出という一定の効果を生み出すとし、荻原(2000)は、送り手の心情を察して繰り返しており、繰り返すことで相手の立場に立っていることを示すことができると説明している。また、李(2013)は、相手の領域を侵す可能性の高い発話を、言い淀みをもった言いさしで発することは、相手の領域を侵すことへの躊躇を示すものであり、対話相手への配慮を示すものであると述べている。[発話943]で[JF028]が「うん、あー、うんうん」や「うん、あー、うんうん。重いよね」のような言い切りの発話を使用

せず、「重いし」と言いさしで発話を終わらせた理由も、先行発話に合わせることにより、 初対面の相手に躊躇を示しつつ距離の短縮を試み、この後の談話展開に繋げたい話し手の 発話理由があると考えられる。

4.1.2 親しい友人

次に、親しい友人の関係で見られた言いさしの繰り返し発話を考察する。例は以下の通りである。

No.	発話者	発話内容	言いさし
62	JF064	なんか、「JF063名」ちゃんはさ(うん)、前話した時に、(うん) こう、その仕事をがっつ、がっちりやって(うん、うん)、で結婚したら一、仕事をやめ、やめる、っていうのは決めてないけどー。	
63	JF063	けっこううん、そういう感じだったよね。	
64	JF064	けっこう、うん、 <u>そういう</u> ふう に。	言いさし
65	JF063	今は、うん。	
66	JF064	うん。	
67	JF063	だから、自分の職業観っていうもの自体が、けっこうあいまいで(うん)、あたしの場合は。	

<例3> 親しい友人

<例3>は卒業後の進路に関して話している場面である。[JF063]が「けっこううん、そういうあうに」とう感じだったよね」と発話をしたことに対し[JF064]が「けっこう、うん、そういうふうに」と言いさしの繰り返し発話で終わらせつつ答えている。親しい友人関係の談話の特徴に関して石黒(2013)は「断片的な表現で会話が成立し、第三者が聞いてわからないことも、伝達が可能になっていると述べている。<例3>の「そういう感じだったよね」「そういうふうに」という受け答えも、第三者が見ると理解しづらい内容であり、断片的な表現で会話が成立している。言いさしの繰り返し発話に続く[発話65]で「今は、うん…。」と話を続け、[発話66]で「うん。」と答えたことからも、お互いが伝達したい内容が理解できていることがわかり、このように断片的な受け答えが成り立っている発話は「共通知識」を持つ友人関係で見られる特徴であるといえる。

親疎関係による言いさしの繰り返し発話は、初対面の関係では、意図的に言語表現を先行発話に合わせることにより、躊躇を示しつつ相手との距離の短縮を試み、親しい友人の

関係では「共通知識」が多いことから断片的な表現で会話が成り立つため、言いさしの繰り返し発話が使用されることがわかった。

4.2 機能

観察された言いさしの繰り返し発話を「表示型」と「要求型」に分類した。結果は<表4>の通りである。

機能	初対面	友人	出現度
1) 表示型	246(89%)	166(85%)	412(87%)
2) 要求型	31(11%)	30(15%)	61(13%)
計	277(100%)	196(100%)	473(100%)

<表4>機能別結果

(単位:回)

結果から、初対面の関係では277回中、表示型が246回(89%)、要求型が31回(11%)見られた。 友人の関係では196回中、表示型が166回(85%)、要求型が30回(15%)見られ、両関係において、表示型が多く使用されることがわかった。まず、表示型として見られた例は以下の通りである。

<例4> 表示型

No.	発話者	発話内容	言いさし
116	JF042	もともとみんな、受ける数少ないじゃん、誰でも、全体的に (あ一)他の大学とかに比べたら。	
117	JF041	確かれて。	
118	JF042	うん。	
119	JF041	<u>のんびりしてるよ</u> ね。	
120	JF042	<u>のんびりしてるよ</u> 、なんか。	表示型
121	JF042	こないだ内定者の話の時とか、あ間違えた、内定者で、こないだ飲んだんだけど、なんかその時とかみんななんか、いろんな企業の名前ぼんぼん出してきて。	
122	JF041	うん 。	

123	JF042	なんか、すごい、"2月とか、さ、す、2月とか落ちまくったよね"みたいな話してて。	
124	JF041	うん 。	
125	JF042	2月って、就活してなかったとか◆2人笑レン。	

繰り返し発話の機能に関して福富(2010)は、相手の発話に対して聞き手は「聞いている」「理解している」という合図を送るためにあいづちをうつが、あいづち詞の代わりに相手の発話(あるいは一部)を繰り返すことであいづち詞の役割を果たすことを説明している。<例 4>は、就職に関して話している場面であるが、[発話119]で[JF041]が「(他の大学に比べたら私達の大学は)のんびりしてるよね」と言ったことに対し[発話120]で[JF042]が「のんびりしてるよ、なんか」と副詞の言いさしを使用しつつ発話を終わらせている。ここで[JF042]は「うん」と答え、発話を終わらせることも可能であるが、先行発話を繰り返しつつ言いさしを用いたことは、先行発話を「理解している」ことの表明であるとともに「自らものんびりしていると思う」という思考を付与した「強調」であると捉えることもできる。[発話120]で[JF042]が「うん」と答え、発話を終わらせなかった理由も、先行発話を繰り返しつつ「自らもその意見に同意している」という「強調」を伝えたい話し手の意図が伺える。

次に、要求型として見られた例は以下の通りである。

<例5> 要求型

No.	発話者	発話内容	言いさし
322	JF041	そうだよね、もう、絶対一生工場で働く経験ないよね<笑いながら>。	
323	JF042	そう。	
324	JF042	なんか、お母さんからのメールで、" <u>ブルーカラー</u> の気持ちを 分かりなさい"とか書いてくあって>{<}<笑いながら>。	
325	JF041	<何>{>} <u>ブルーカラー</u> って? []。	要求型
326	JF042	だから、工場労働者とかさ、現場の。	
327	JF041	<b->{<}。</b->	
328	JF042	<働く>{>}その<そういう>{<}。	
329	JF041	<いい>{>}お母さんだなー。	
330	JF042	うん。	

要求型は、相手の発話の不明な点に関して確認・説明を求める機能が含まれる。<例5>

は、就職に関して話している場面であるが、[発話324]で[JF042]が「お母さんからのメール で、"ブルーカラーの気持ちを分かりなさい"とか書いてあって」という発話に対し[JF041]が 「ブルーカラーって?」と聞き返し「ブルーカラー」に関する説明を要求している。

このような要求型「2)の繰り返し発話に関して、福富(2010)によると、相手の発話を言語 表現としては理解できる(聞き取れている)が、内容に関して不明な部分があり、説明を求 める機能があり、不明な部分に関する説明を要求するために、相手の発話のうち不明と感 じた部分を繰り返すと述べ、この説明の要求を受けた話者は必ず何らかの応答を行ってい るとしている。[JF041]は「ブルーカラー」が理解できず聞き直しており、それに対する後行 発話で[JF042]が「だから、工場労働者とかさ、現場の、」と説明をし始めたことから、「発話 325]は要求型であると捉えることができ、説明を要求することで、その後の談話の進め方を 相手に委ねている(永田:2001)。要求型の言いさしは、曹(2005)の「情報要求」機能は韓国語で は使用頻度が高く、日本語では使用頻度が低いという報告からもわかるように、日本語母語 話者間の談話において、使用頻度が低いことが伺え、その中で特に言いさしの繰り返しとし て現れる要求型は出現度が低いことがわかった。初対面と友人の両関係で表示型が多く見ら れたことから、観察された言いさしの繰り返し発話を下位分類する必要がある。

観察された各機能を下位分類した結果は以下の通りである。

機能		初対面	友人	計
	感情表出	41(15%)	14(7%)	55(12%)
1) 丰子刑	情報提示	105(38%)	66(34%)	171(36%)
1) 表示型	認識・受信	77(28%)	26(13%)	103(22%)
	間つなぎ	23(8%)	60(31%)	83(18%)
2) 要求型	説明要求	21(7%)	14(7%)	35(7%)
2) 安水至	確認要求	10(4%)	16(8%)	26(5%)
計		277(100%)	196(100%)	473(100%)

<表5> 機能下位分類結果

(単位:回)

機能の下位分類を親疎関係別に見ると、初対面は「情報提示」が圧倒的に高い生起比率を 示し、次に「認識・受信」機能が多く見られた。一方、友人関係は「情報提示」「間つなぎ」の2 つの機能が多く現れ、親疎関係による言いさしの使用に違いが見られることがわかった。

¹²⁾ 福富(2010)では「説明要求」の機能に分類している。

以下、各関係において見られた機能の特徴について考察する。

4.2.1 初対面

初対面における言いさしの繰り返し発話を考察する。初対面の関係では「情報提示」「認識・受信」機能が特徴として現れた。まず、最も多く見られた「情報提示」の例を以下に示す。

No.	発話者	発話内容	機能
361	JM051	<エ ド>{>}シーランとか(うんうんうんうん)わかります?。	
362	JF196	わかんないく2人で笑い。	
363	JM051	あ、わかんない、わかんないですか。	
364	JM051	そっか<洋楽聞かないか>{<}。	
365	JF196	<\ いや一洋楽か>{>}。	
366	JF196	<u>洋楽聞かない</u> んですよね、 ほぼ 。	情報提示
367	JM051	あ、そうですよね。	

<例6> 情報提示

「情報提示」は聞き手が認識していない新しい情報を提示する機能を果たす。<例6>は、音楽に関して話している場面であるが、[発話364]で[JM051]が「そっか、洋楽聞かないか」という発話に対して[発話366]で[JF196]が「洋楽聞かないんですよね、ほぼ」と答えている。「洋楽を聞かない」という聞き手が知らない新しい情報を伝えているため、情報提示機能と捉えることができる。初対面で情報提示機能が見られた理由も、お互いに関する共通知識がない関係であるため、聞き手が知らない情報を伝える「情報提示」が多く見られたと考えられる。また、情報提示の特徴として、繰り返しに加え[発話366]の「ほぼ」のように文末に副詞を付け加える言いさしが多く見られた。副詞の言いさしが見られた例は以下の通りである。

<例	7>	情報提示
~ [7]	//	

No.	発話者	発話内容	機能
393	JM051	行ったことないんですよ、俺、フランス。	
394	JF196	いや、めちゃめ、めちゃくちゃいいですよ。	
395	JM051	どこ行きました?。	

396	JM051	レーブ/レ {<}?。	
397	JF196	<フランスー>{>}。	
398	JM051	<u> </u>	
399	JF196	<u>パリー</u> 、とか <いろいろ >{<}。	情報提示
400	JM051	< <u>/\bullet</u>	
401	JM051	あ、<ほんとですか>{<}。	
402	JF196	< <u>ルーブル</u> >{>}とか回ったり<軽い笑い。	情報提示
403	JM051	[ささやき声で]いいですね。	
404	JM051	向こうの人、でもね、英語話し、しようとしないですよね、 たぶん。	

<例7>はフランス旅行に関して話している場面である。[発話399]の「パリー、とかいろい ろ」のように先行発話の繰り返しに副詞を加え、発話を終える言いさしが多数観察された。 李(2013)においても、初対面の「情報提示13)」で「みたいな」のような引用表現が多く見られ たことを示しているが、これは断定を避ける表現を使用することで自分の意見などを和ら げて聞き手に伝えることができると説明している。初対面の関係で特に、聞き手に情報を 提示する機能に加え、副詞表現「いろいろ」や例示表現「たり」、並列表現「とか」のような表 現が多く見られ、これらの表現を用いることで文末に「含み」を持たせ、今後の談話の展開 に繋げようとする話し手の意図があると考えられる。

次に多く見られた「認識・受信」機能の例を以下に示す。

<例8>認識・受信

No.	発話者	発話内容	機能
386	JF195	<月に>{>}、見に行ったりしますか?[]。	
387	JF051	え、映画(<軽い笑い>)(はい)《少し間》とかはほん(はい)とに、見たいのあったらす、見に(お一)行くーレベ、でもほ、邦画は見ないんですけどね。	
388	JF195	あ、あーあーあー。	
389	JF051	うん一まあ、ほ、ほとんど洋画一ばっかりで(はい)、ま、邦画見たのは、ま、『カメラを止めるな!』 ―、は(あーあー)ちょっと <u>見て一(</u> はい)、 <u>おいたほうがいいかなーっくて>{<</u> }。	
390	JF195	<あ>{>}、 <u>見ておいた<ほう</u> が>{<},	認識・受信

¹³⁾ 李(2013)では「情報伝達」機能に分類している。

391	JF051	<~hu>{>}.	
392	JF195	いいですか?[](<笑い▷)。	
393	JF051	ま、結果的に面白かったんですけどね(はい)、はい、全然あの見ないん(お一)ですけど、まあ<見てみ>{<}。	
394	JF195	<どんな>{>}感じのストーリーでしたっけ?[]。	

<例8>は、最近見た映画の話をしている場面である。[発話389]で[JF051]の「この邦画は見 ておいたほうがいい」という発話に対し「発話390]で[JF195]が「あ、見ておいたほうが」と言 いさしの繰り返し発話で応答している。<例8>のような認識機能14)に関して中田(1992)は 「聞いたことを復唱するようなものは、受信の応答と聞き取りの正誤確認を同時に行うこと ができる。同じ応答でも「はい」や「あ、そうですか」は聞き間違いがあった場合チェックで きないが、情報の復唱は伝達を円滑にしつつ確実性を高める効率アップの機能がある」と説 明している。初対面の発話で「認識・受信」機能が多く見られた理由も、お互いの共通知識 がない中で、相手の発話を繰り返すことにより「相手の発話を理解している」という認識に 加え「自らの認識が正しいのか」に関する確認を同時に遂行する機能として用いられること が伺える。

認識・受信機能に関して福富(2010)は「互いの連帯感を強めようとする」とし、「相手に自 分も相手の提供している話題に共感を感じている、あるいは興味を持っていると示そうと 努力している」表明であると説明している。 また、 荻原(2000)は「話の流れからキーワード 的な言葉を選んだり、送り手の心情を察して繰り返しており、繰り返すことで相手の立場 に立っていることを示すことができ、とりあえず相手の言うことをそのまま受け取り、自 分を相手に合わせて、相手をよりよく理解しようとする機能が含まれる」と説明してい る。このような日本語の会話スタイルに関して荻原(2015)は「相手が述べたことに対して 様々な推量を行って理解する責任が課せられている」と、言語文化的背景から説明してい る。実際にその後の後行発話で[JF195]が「(その映画)いいですか?」と、相手が提供した話題 に興味を示していることからも、相手をより良く理解しつつ連帯感を強めようとし、より 円滑な談話の展開に繋げる「認識・受信」機能が説明でき、共通話題が友人の関係より比較 的少ない初対面で見られた特徴であるといえる。

以下の例も「認識・受信」機能として見られた例である。

¹⁴⁾ 中田(1992)では「受信応答機能」として説明している。

No.	発話者	発話内容	機能
420	JF019	本とか読みます?。	
421	JF020	英語?。	
422	JF019	いやいやいや、日本語で。	
423	JF020	あ一、 <u>日本語で。</u>	認識・受信
424	JF019	あたし読書大好きなんですよー。	
425	JF020	ロシア文学?=。	
426	JF019	うん 。	

<例9>は、どんな本を読むのかに関する話をしている場面である。[発話421]で[JF020]に 「英語?」と聞かれ、「発話422]で[JF019]が「いやいやいや、日本語で。」と言ったことに対 し、[発話423]で[JF020]が「あー、日本語で...。」と言いさしの繰り返しを使用しつつ応答し ている。中田(1992)は、「同じ応答でも「はい」や「あ、そうですか」は聞き間違いがあった場 合チェックできないが、情報の復唱は伝達を円滑にしつつ確実性を高める効率アップの機 能がある」と説明している。また、既に上述したように、繰り返し機能はきちんと聞き取れ たかに関する正誤確認を同時に行うことができる(中田:1992)ため、このような機能が円滑 な談話展開の機能を果たしているといえる。

また、荻原(2015)は「質問―回答―繰り返し」の会話連鎖は「日本語母語話者間に存在する 習慣的で規範的に期待されるやり取りの会話スタイル」であると述べている。<例9>で [JF020]が「英語?」と質問し[JF019]が「いやいやいや、日本語で。」と答え、続く発話で [JF020]が「あー、日本語で…。」と認識する繰り返しが多数見られたことも、習慣的に相手 の発話の一部を繰り返し「相手の話を認識し、理解していることを伝える」会話スタイルが 反映されているといえる。

4.2.2 親しい友人

親しい友人関係における言いさしの繰り返し発話を考察する。親しい友人の関係では「情 報提示」「間つなぎ」機能が特徴として現れた。まず、最も多く見られた「情報提示」の例を以 下に示す。

<例10> 情報提示

No.	発話者	発話内容	言いさし
61	JF052	あと、親知らずの手術もしなきゃいけな<くって>{<}。	
62	JF051	<「JF052名」>{>}が?。	
63	JF052	え。	
64	JF051	彼女が?。	
65	JF052	彼女が。	情報提示
66	JF051	ふーん。	
67	JF052	で、それが1ヶ月くらいちょっとだめみたいなことを(うんうんうん)言ってたんだけど。	
68	JF052	それが長引いてるのか。	
69	JF051	うん 。	
70	JF052	よく分かんない。	
71	JF052	ちょっと心配。	
72	JF051	心配。	

<例10>の[発話61]で[JF052]が「あと、親知らずの手術もしなきゃいけなくって」と発話を したことに対し、[発話62][発話64]で[JF051]が「「JF052名」が?」「彼女が?」と聞き返し、[発話 65]で[JF052]が「彼女が」と答えている。このような情報提示の繰り返しに関して荻原(2008) は、聞き手がすでに持っている不確かな想定を、確信に変える機能があると説明してい る。<例10>は「発話64]まで「JF051」が持っていた不確かな想定を確信に変えるため、続く「発 話65]で[JF052]が「彼女が」と、先行発話を繰り返し発話を終わらせている。情報提示の機能 は、これまで不確かであった相手の想定を確信に変え、円滑な談話展開に繋げる機能を持 つと考えられる。その後の後行発話[発話66]で[JF051]が「ふーん」と応答していることから 「手術をする人が彼女であること」を理解し、このような情報提示の言いさしの繰り返し発 話は、相手の不確かな想定を確信に変える機能を含め、続く談話に繋げる展開機能がある といえる。

<例11>情報提示

No.	発話者	発話内容	言いさし
113	JF004	なんで?、「JF003苗字」先生ダメなの?、アクセントが。	
114	JF003	違うの、あの一、私のアクセント直すんじゃなくって一、生 徒が<言ったの>{<}。	

115	JF004	<あ一、生徒の>{>}<アクセント>{<}<笑いながら>。	
116	JF003	<私が>{>}直せばいいじゃん。	
117	JF003	私が直す前に直すのよ。	
118	JF004	え、自分の学生じゃない学生も直すの?。	
119	JF003	自分の学生を。	情報提示
120	JF004	を、直すの?。	
121	JF003	うん。	
122	JF004	なんなの?、その人。	

<例11>はティーチングアシスタントをしている学生に関して話している場面である。[発 話118]で[JF004]が「え、自分の学生じゃない学生も直すの?」と聞いたことに対し、 [発話119] で[JF003]が「自分の学生を」と言いさしの繰り返し発話を使用しつつ答えている。

認知効果の繰り返しに関して荻原(2008)では「聞き手が持っていた誤った想定を覆し、そ の想定の放棄に導く」機能があると説明している。話し手はJF004|が持っている誤った想定 を覆すために「自分の学生を」と再度発話することで、聞き手の誤った想定を覆し、訂正す る話し手の意図が伺えることから、情報提示機能として捉えることが可能である。また、 [発話119]で[JF003]が「自分の学生を直すの」と言い切り表現を使用すると、冷たい印象を与 える(柏崎:2001)ため、話し手は言いさしの繰り返し発話を使用しつつ、聞き手に新しい情 報を提示するこのような発話は友人関係で多く観察された。

また、情報提示15)機能に関して中田(1992)によると、何かを述べたり情報を伝えたりす る際、発話のすべての部分が同等の重みを持つわけではなく、話し手は、特に重点を置く 部分を何らかの形で受け手に印象づけ、理解を促そうとする機能、さらには、質問に答え る時にも、問いの文を繰り返すことで内容を強く押し出すことができると説明している。 また、ことばを言い換えることは繰り返しの持つ「くどさ」を軽減することであり(中 田:1992)、言い換えると、相手のことばをそのまま繰り返すことは「くどさ」を付与するとと もに、それが強調の意味に繋がり、結果として、特に重点をおく部分が強調され、聞き手 の誤った想定を修正する情報提示として相手に伝達される機能を果たすといえる。

¹⁵⁾ 中田(1992)では「理解の徹底」機能に分類している。

<例12>間つなぎ

No.	発話者	発話内容	機能
439	JF050	<おかしい>{>}、確かに、おかしいよね<笑いながら>。	
440	JF050	なんか、斜め、しゃ=【【。	
441	JF049	】]="い、ま、か、ら、い、き、ま、す"[強調した発音]、みたいなさ<2人笑い。	
442	JF049	でそう、それでなんかも、も、盛り上がっちゃって、みんな。	
443	JF050	あああく笑いながら>。	
444	JF049	で、なんかしてたみんなが。	
445	JF050	ふふふ、そう<笑いながら>。	
446	JF049	そう。	
447	JF049	"そ、れ、で"[強調した発音]、とか言って、ずーっと言ってんのさ…<笑いながら>。	
448	JF050	" <u>そ、れ、で</u> "[強調した発音]、 <u>とか言って</u> <笑い。	間つなぎ
449	JF049	そうなんかコンピューターがね(あー)、壊れた時に(うん)、外国とこう通信が、あ、外国の通信が壊れた時っていうかなんか。	
450	JF050	うん 。	
451	JF049	日本語が使えないやつで,,	
452	JF050	うんうんうん 。	

間つなぎ機能は、ことばのリズムやテンポを良くしたり、ユーモアを込めたりすることば遊び的な要素が含まれる。<例12>は、先生の話し方に関して話をしている場面である。 [発話447]で[JF049]が「"そ、れ、で"とか言って、ずーっと言ってんのさ」と発話をしたことに対し、[発話448]で[JF050]が「"そ、れ、で"、とか言って」と先行発話を繰り返しつつ言いさしで発話を終わらせている。

<例12>のような間つなぎ機能に関して福富(2010)は、ことば遊び的な繰り返しは、リズムやテンポを整えることを含めて、ことば遊びを楽しんでいるものが多いとし、荻原(2015)では、短いやりとりでのリズム感やテンポが生まれるという詩的機能を果たすとともに、会話の盛り上がりを感じ、相手の話をきちんと聞いているという合図を送り合ったり、共感や同調といった心的機能も果たし、また、相手の会話を繰り返すことで、話を続けやすくなるという交話的機能を果たしていると説明している。

. [77.]	10.	HH	_ 2.	711
<例	13>	旧二	つな	\preceq

No.	発話者	発話内容	機能
569	JF050	その一、何?、もうなんか、20代のお姉さんは、窓口で、その 代を、こう。	
570	JF049	<u>越すと</u>	
571	JF050	越すと	間つなぎ
572	JF049	入り口のほうに<笑いながら>。	
573	JF050	<u>入り口のほうに</u> <笑いながら>。	間つなぎ
574	JF050	"本日は何のご用件で"、みたいなさ…<笑いながら>。	
575	JF049	ねー。	
576	JF050	えー、あんなん<なるのーと思っちゃう>{<}。	
577	JF049	<すっごいはっきりしてるよねー>{>}、あそこは。	

<例13>も間つなぎとして見られた発話である。福富(2010)の結果から、繰り返しの場 合、相手の発話を一回繰り返して終わるのではなく、お互い数回ずつ繰り返しをやりとり する場面が多く見られたことを報告していることから、このような繰り返しは日本語母語 話者間で頻繁に使用されることが説明できる。この機能は、共通知識を持ちリズム感やテ ンポを喚起できる関係、特に親しい友人の関係で多く見られることがわかった。なお、本 研究では先行発話が言いさしであった場合の繰り返し発話の影響に関しては用例数が少な く、考察には至らなかったため、今後より多くの用例を集める必要がある。先行発話の影 響による繰り返し発話は考察は今後の課題としたい。

以上のことから、親疎関係による機能は、初対面の関係では「情報提示」「認識・受信」 が、親しい友人の関係では「情報提示」「間つなぎ」が特徴であることがわかった。初対面に おける「情報提示」は、お互いの共通知識がない関係であるため、聞き手が知らない情報を 伝えるため使用され、「認識・受信」は「相手の発話をしっかり理解している」という認識に 加え、自らの認識が正しいか「確認」を同時に遂行したい話し手の意図があると考えられ る。また、親しい友人関係で見られた「情報提示」は、相手の不確かな想定を確信に変え、 円滑な談話展開に繋げる機能が見られ、「間つなぎ」は共通知識を持ちリズム感やテンポを 喚起できる関係で話を盛り上げ、続く談話に繋げたい話し手の意図があるといえる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日本語母語話者の言いさしの繰り返し発話を「談話展開機能」と捉え、使用様相と機能の観点から考察した。本研究から得られたことをまとめると以下の通りである。

- 1)繰り返し発話の中で言いさしの繰り返し発話は46%の確率で使用されることがわかった。理由としては、話し手は話し言葉における「効率性」を重視した結果、言いさしの繰り返し発話が約半数の割合で見られたと考えられる。
- 2) 親疎関係別に見ると、初対面の関係では58%、友人の関係では35%言いさしの繰り返し発話が見られた。初対面の関係では、相手に躊躇を示しつつ距離の短縮を試み、協調的な関係を築こうと試みる話し手の意図、親しい友人の関係では、共通知識が多いため、断片的な表現で会話が成立するため、言いさしの繰り返し発話が使用されたと考えられる。
- 3) 機能別に見ると、初対面の関係は「情報提示」「認識・受信」機能が多く使用されていた。理由として「情報提示」は、お互いの共通知識がない関係であるため、聞き手が知らない新しい情報を伝え、「認識・受信」は「相手の発話をしっかり理解している」という認識に加え、自らの認識が正しいか「確認」を同時に遂行する機能が含まれるといえる。
- 4) 親しい友人関係では「情報提示」「間つなぎ」機能の言いさしの繰り返し発話が多用されることがわかった。理由として「情報提示」は、新しい情報の提示とともに相手の不確かな想定を確信に変える意図、「間つなぎ」は、リズム感やテンポを喚起できる関係で話を盛り上げ、続く談話に繋げたい話し手の意図が伺える。

以上の結果から、日本語母語話者の談話資料から言いさしの繰り返し発話の使用様相と 機能を分析することで、従来行われた研究の観点では観察できなかった特徴を示すことが できた。本研究では、言いさしの繰り返し発話を「初対面」「友人」の関係を対象に分析を 行ったが、社会的地位による親疎や、今回、分析の対象外としたフィラーやあいづち、パ ラフレーズを含めた繰り返し、言い切りの繰り返しの機能、相手の発話が言いさしであっ た場合の繰り返し発話の考察には至らなかった。また、本研究では雑談を対象とし、依頼 場面や断り場面を含む特定の場面を設定した談話の考察には至らず、今回の結果が特定の 場面を対象にした繰り返し発話においても同様の傾向が見られるのか、また、李(2013)は 言いさしの形式にも着目しており、繰り返し発話の形式などに着目することで、新しい観 点からの考察も可能だと考えられる。これらの内容は今後取り組むべき課題である。

【参考文献】

- 李恩美(2013)「大学生の親疎間の会話における「中途終了型発話」に関する一考察」「일본언어문화」26、한국일 본언어문화학회, pp.269-286
- 石黒圭(2013)『日本語は「空気」が決める』光文社新書、pp.140-143
- 元智恩(2000)「断わりとして用いられた日韓の『言いさし文』についての語用論的分析」『日語日文学』13、大韓 日語日文学会 pp.81-95
- 荻原稚佳子(2000)「日本人の言いさし表現に対する察しの現れ方」 『講座日本語教育』 36、早稲田大学日本語研 究教育センター、pp.69-85
 - (2008) 『言いさし発話の解釈理論: 「会話目的達成スキーマ」による展開』 春社風、pp.30-38, p.65
- (2015)「日中母語話者の繰り返しを含む会話の連鎖からみえる会話スタイル・質問-応答場面の 連鎖を中心に - 」『多文化関係学』12, 多文化関係学会, pp.39-55
- 小此木江利菜(2020)「依頼談話における言いさし表現「けど」に関する考察・機能と負担度に着目して・」『日 本文化學報』86, 韓国日本文化学会, pp.25-41
- 柏崎秀子(2001)「談話の展開と表現が聞き手の印象評定に及ぼす影響―「実験語用論」の試み―」『東京工業大 学留学生センター年報』5、東京工業大学留学生センター、pp.49-54
- 白川博之(1991)「「テ形」による言いさしの文について」 『広島大学日本語教育学科紀要』1、広島大学教育学部 日本語教育学科, pp.39-48
- (2009)『「言いさし文」の研究』 くろしお出版, pp.15-38
- 高木丈也(2018)『日本語と朝鮮語の談話における形式と機能の関係―中途終了発話文の出現を中心に―』三 元社, p.52, pp.59-89, pp.173-183, p.191
- 英南(2005)「字幕付き映画における韓日の言いさし表現の対応関係―「述部有り」の言いさし表現を中心 として--」『言語文化と日本語教育』27、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、pp.102-115
- 中田智子(1992)「会話の方略としてのくり返し」『国立国語研究報』13, pp.263-302 永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3, 社会言語科学会, pp.17-26
- 福富奈美(2010)「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究言語情報編』5、大阪府立大 学人間社会学部言語文化学科, pp.105-125
- Jefferson, Gail(1972)Side sequences. In D.N. Sudnow (Ed.) Studies in social interaction. New York: Free Press.

논문투고일 : 2021년 06월 04일 심사개시일 : 2021년 07월 14일 1차 수정일 : 2021년 08월 06일 2차 수정일 : 2021년 08월 16일 게재확정일 : 2021년 08월 20일

〈要旨〉

言いさしの繰り返し発話に関する考察

- 親疎関係による使用様相と機能を中心に -

小此木江利菜

本研究では、日本語母語話者の発話資料から、言いさしの繰り返し発話を取り上げ、使用様相を機能の観点から考察 した。観察された発話から、繰り返し発話は計1036回中、言いさしの繰り返し発話が473回見られ、出現度は46%で あった。親疎関係別に見ると、初対面で見られた繰り返し発話は計481回であり、その中で言いさしが277回(58%)、親 しい友人の関係を見ると、繰り返し発話は計555回中、言いさしが196回(35%)見られ、この結果から親疎関係による言 いさし繰り返し発話の使用に差が見られた。初対面の関係では、相手に躊躇を示しつつ距離の短縮を試み、協調的な関 係を築こうと試みる話し手の意図、親しい友人の関係では、共通知識が多いため、断片的な表現で会話が成立するた め、繰り返しの言いさし発話が見られたと考えられる。また、機能別に見ると初対面は「情報提示」が圧倒的に高い生起 比率を示し、次に「認識・受信」機能が多く見られた。一方、友人関係は「情報提示」「間つなぎ」の2つの機能が多く見ら れ、親疎関係による言いさしの使用に違いが見られた。初対面は、お互いの共通知識がない関係であるため「情報提示」 が多用され、親しい友人関係で見られた「間つなぎ」はリズム感やテンポを喚起できる関係で話を盛り上げ、続く談話に 繋げたい話し手の意図が伺える。

A Study on the Repetition of Interrupted Speech

- A Study on the Aspects and Functions of Intimate Relations -

Okonogi, Erina

In this study, we focused on the repetition of Interrupted Speech from the speech data of native Japanese speakers, and examined the usage aspects from the viewpoint of function. From the observed utterances, out of a total of 1036 repetitive utterances, 473 repetitive utterances were found, with a frequency of 46%. In the case of close friends, out of a total of 555 repetitive utterances, 196 (35%) were repetitive Interrupted Speech, indicating a difference in the use of repetitive utterances. This result shows that there is a difference in the use of repeated utterances by familiarity. In the first meeting relationship, the speaker's intention was to try to shorten the distance and build a cooperative relationship while showing hesitation to the other party. In the close friend relationship, repeated Interrupted Speech were seen because the conversation could be established with fragmentary expressions due to the large amount of common knowledge. By function, "information presentation" had by far the highest occurrence rate in the first meeting, followed by "recognition/reception" functions. On the other hand, in the case of friendships, the two functions of "information presentation" and "pause" were frequently observed, and there was a difference in the use of phrases depending on the intimate relationship. In the case of the first meeting, "information presentation" was often used because both parties did not have common knowledge, while "pause connection" was used in the case of close friendships, suggesting the speaker's intention to use the relationship to evoke a sense of rhythm and tempo in order to liven up the conversation and lead to further discourse.